

主 題：教会のあるべき姿 = 土台

聖書箇所：マタイの福音書 16章18-19節

テーマ：聖書の教える教会のあるべき姿とは？

詩篇の学びを楽しみにしておられた方、16篇を何度も読みましたと言われる方は今日のメッセージの箇所を見て少しがっかりされたかもしれません。しばらく詩篇はお休みです。今日から私たちは違うことをみことばからいっしょに学んでいきたいと思えます。前にも言いましたが、時間はかかっても詩篇の150篇は皆さんと見ていくことが出来ればと思っているので安心してください。詩篇にはまた戻って来ます。それまではこれまで学んだことをしっかり心に留めておいてください。

今日から皆さんとともに考えていきたいことは「教会について」です。今日のタイトルにある通り、今一度、「教会のあるべき姿」について、聖書が教えている教会とはいったいどのようなものなのかについて、少し時間を取って考えてみたいのです。今、私たちの教会は様々な面で新しい体制へと変わろうとしている過渡期にあります。この4月からは新しい長老会のリーダーシップの下で、神に喜ばれる教会をともに建て上げていこうと願っています。もちろん、私たちは前回の詩篇を通して見たように、それぞれがみことばを益々愛して主に似た者になっていく、そのことを追い求めていく必要があるし、聖い神の前に立つのにふさわしい真の礼拝者として日々変わり続けていく、そのような責任があるのです。

同時に、私たちの信仰の歩みは他の人の助けを一切必要としないような孤独なものではありません。私たちは主を愛して同じ神を父とする神の家族に招き入れられた者として、兄弟姉妹の間でみことばを実践し教会として成長していくことが必要になるのです。そして、そのときに最も大切なことは、私たちが思い思いに好き勝手に考えて行動するのではなく、聖書が教えている教会のあるべき姿に立ち続けることです。私たちの周りのものは時間とともに変わっていきます。時が経てば教会の中にもいろいろな変化が起こります。

先日、私は皆さんもお持ちの顔写真の入った教会員の名簿を見ていました。約10年前に作成されたものです。10年も経てば多くのことが変わります。もちろん、今も全然変わっていない方もおられますが、写真を見ると、赤ちゃんだったり幼かった子どもたちが大きくなっています。また、もう天に召された愛する兄弟姉妹の写真も見る事が出来ました。私たちの教会を見渡せば、この中に載っていない新しい人たちも何人か加えられていて、教会に集う人たちに変化があります。それだけでなく、時が経てば教会の中で行われている働きやその広報においても変化がありました。今、私たちはこのように場所を離れていてもライブ礼拝ができ、ズームやラインなどを通して学びをすることができるのです。

振り返ってみると、このことは以前では考えられないことです。周りのものはこうして時間とともに変わっていきます。そして、変化していくことが一概に悪いわけでもありません。しかし、私たちが教会として成長していこうとするとき、知らず知らずのうちに、決して変えてはならない教会の土台となる部分を別のものに置き換えてしまっているなら、それは大きな問題です。私たちが基盤となるものが何なのかを忘れてしまっているなら、本来あるべき姿から道を外して、途方もない所へと迷ってしまうことになるのです。教会のあるべき姿を思い出し続けること、そこに立ち続けること、そのことは教会として成長していく上で最も大切なこととなります。

皆さん、もし、私たちがみことばに立つことを止めて、この世の考えや自分たちの持っている伝統や慣習を優先して、それぞれの考えに則って教会を運営していこうとするなら、その教会は真の教会ではなくなってしまいます。私たちがどれだけことばで「これが教会だ！」と言い張ったとしても、神が求

めておられる教会を私たちが建て上げていないなら、私たちが聖書が教えている姿と異なる証を立てているなら、それはもう教会ではないのです。

では、私たちが決して揺るがせてはならない教会の在るべき姿とはどのようなものでしょうか？私たちが絶対に忘れてはならない教会の根底とはいったい何なのでしょう？そのことを今回からともに考えていきたいと思えます。今日、この土台の部分を考えるに当たってマタイの福音書16章18-19節をテキストとして選びました。それは新約聖書において「教会」ということばがこの箇所です。もちろん、皆さんもよくご存じの通り、この当時はまだ教会は実際には存在していませんでした。それが誕生することになるのは、使徒の働き2章にあるように、弟子たちに聖霊が注がれるペンテコステ以降になるのですが、この箇所で見ることが出来るのは、イエスが教会が実際に誕生する前から、ご自分がどのような教会を建て上げようとしていたのか、その青写真が明らかに記されていることです。だからこそ、私たちがどのような教会であるべきかを考えるに当たって、この箇所を見るならその教会の姿を見ることが出来るのです。その特徴をこの中に見ることが出来ます。いったい、主は教会のあるべき姿としてどんなことを考えておられたのか？そのことをともにみことばから見ていきたいと思えます。

今日見るのはマタイ16:18-19のところですが、これがどのような文脈で書かれているのか、そのことを理解するために13-20節を読みます。「:13 さて、ピリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき、イエスは弟子たちに尋ねて言われた。「人々は人の子をだれだと言っていますか。」:14 彼らは言った。「パプテスマのヨハネだと言う人もあり、エリヤだと言う人もあります。またほかの人たちはエレミヤだとか、また預言者のひとりだとも言っています。」:15 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」:16 シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」:17 するとイエスは、彼に答えて言われた。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。」:18 ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。」:19 わたしは、あなたに天の御国のかぎを上げます。何でもあなたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたが地上で解くなら、それは天においても解かれています。」:20 そのとき、イエスは、ご自分がキリストであることをだれにも言ってはならない、と弟子たちを戒められた。」

皆さんもよく知っているマタイの箇所ですが、13節にあるようにイエスと弟子たちはガリラヤ湖から北に約40キロほど離れた場所にあるピリポ・カイザリヤという地方にやって来たのです。当時、この地方の統治者であったヘロデ大王の息子ピリポという人物によって、地中海の沿岸にあった別のカイザリヤと区別するために自分の名前を取ってピリポ・カイザリヤと名付けられたこの町には多くの異邦人が溢れていました。また、この町にはこの町の特徴としてカイザルを神として祀った白い大理石の神殿があったり、バールの神や自然の神パンなど数多くの神と呼ばれる存在を祀る神殿があちこちに建てられていました。この町は偶像礼拝が盛んなところでした。人々は自分たちが作り出した偶像を熱心に拝んでいたのです。そんな町の光景を目の前にして、自分に残された地上での生活がもう長くないことを知っていたイエスは、弟子たちと個人的な時間をとってご自分がいったいだれなのか、そして、それに加えて教会とは何かについて大切なレッスンを、今日私たちが見ようとしている18、19節で教えようとしたのです。

☆教会のあるべき姿 : 四つの特徴

では、教会のあるべき姿に関して私たちはどのようなものを主のことばの中から見ることが出来るのでしょうか？そのことを考えていく上で、少なくとも教会のあるべき姿として、18、19節のイエスのことばの中に四つの特徴を見ることが出来ます。

1. 教会は揺るがない土台の上に建っている 18 a 節

教会は揺るがない土台の上に立っているということです。18節はこのように始まっています。「ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。」、

1) 「この岩」とは何を指しているのか？

ここでイエスはご自分の教会を「この岩の上に建てる」と言われたのですが、「岩」とはいったい何を指しているのでしょうか？恐らく、多くの皆さんがご存じのとおりこのことばに関しては歴史上多くの議論が為されて来ました。なぜなら、私たちがこの18節を読むとき、一見イエスがペテロの上に教会を建てようとしていると思えるからです。そして、皆さんもご存じのように、ペテロという名には「岩」という意味があります。だから、ローマカトリック教会はこの箇所を取って、ペテロこそがイエスによって選ばれた教会のかしら、権威を持った最初の教皇であると今もそのように信じているのです。

しかしこの「岩」はもちろんペテロでないことはみことばを読めば明らかです。教会の土台はペテロという人物の上に据えられているではありません。では、なぜそのように言えるのか？様々な理由を挙げることができますが、少なくとも二つの理由によってこの岩がペテロを指しているのではないと私たちは言うことができます。

○「岩」がペテロでないと言える理由

文法から : ペテロを「岩」と取ることは文法的に間違っているのです。ペテロという名はイエスがシモンをご自分の弟子とされたときにあだ名として彼に与えたものですが、このことばは男性名詞としてここで用いられています。ペテロが男性であるように男性名詞としてここに書かれているわけです。これはギリシャ語で「ペトロス」という比較的小さな石を表すことばで、それがここで使われているのです。しかし、この「岩」ということばを見ると、このことばには先ほどとは別の「ペトラ」という女性名詞が用いられています。この「ペトラ」は先の小さな石を表す「ペトロス」とは異なって、より大きな基盤となる「岩」を表しているのです。どういうことか？こうして原語を考えてみるなら、そもそも「ペテロ」ということばと「岩」ということばは別のものであることが分かります。片方は男性名詞でもう片方は女性名詞であること、そして、片方は小さな石を表すことばで、もう片方は大きな基盤を表すことばが使われているのです。だから文法的に見たときに、この岩がペテロを指しているのではないと言うことができるのです。

文脈から : 二つ目の理由はこのことばが使われている文脈です。18節の文脈を見ると「岩」がペテロを指しているのではないと言えます。どのような文脈でしょう？18節に至るまでにどのようなやり取りがなされていたのか思い出してみてください。13節から見て、イエスは弟子たちに二つの質問をしています。一つ目は「人々は人の子をだれだと言っていますか。」というものでした。13節に書かれています。その問いへの答えとして14節に様々なものが挙げられています。「バプテスマのヨハネだと言う人もあり、エリヤだと言う人もあります。またほかの人たちはエレミヤだとか、また預言者のひとりだとも言っています。」とあります。人々はイエスがその道中様々なところで奇蹟を為していたということ、様々なすばらしいわざを為していたということを噂として耳にしていたのでしょう。だから、人々はこの人は普通の人とは違う何か特別な存在だというに気づいていたのです。だから、バプテスマのヨハネではないか？エリア、エレミヤではないか？預言者ではないか？とそのように考えたのです。

しかし残念ながら、彼らはイエスを知識として少しは知っていたとしても本当のイエスの姿を理解している者はだれひとりとしていませんでした。イエスがいったいどのような存在かを人々は分からなかったのです。そこで今度はイエスは弟子たちに同じ質問をします。15節「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」と。他の人はわたしについていろんなことを言っている、いろんな考えをもっている。でも、あなたがたは、わたしと2年半をともに過ごして来たあなたがたは「わたしをだれだと言いますか。」と。次の箇所を見なくてもこの質問にだれが真っ先に答えたのか、そのことは私たちは容易に想像できます。この質問に答えたのはペテロでした。感情的で確かに後先を考えずに行動して多くの失敗をした

ペテロでしたが、彼は十二弟子の代弁者として、また、ここで最も大切な質問に対する正しい答えを述べています。ペテロの答えが16節に書かれています。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」と。

皆さん、この光景を頭に思い描いてみてください。先に見ましたが、弟子たちはピリポ・カイザリヤの地方にやって来ていました。この地方にはたくさんの偶像が溢れていました。人々は人が作ったいのちのない偶像を礼拝し拝んでいたのです。弟子たちはそのような光景を前にしてこのように告白したのです。「主よ、あなたはこんな人の手によって作られた虚しい力のない存在ではありません。あなたこそが旧約の時代から約束されていた救い主、生きた力ある神の御子です。あなたこそが生ける神の御子キリストです。」と。そして、その告白こそがイエスがこの岩と言われた教会の土台でした。ペテロではありませんでした。「主が生ける神の御子キリストである」というこの信仰告白こそが教会を建て上げる上で揺るがぬ土台となるものだったのです。

皆さん、もし、ペテロが教会の土台であったなら、私たちは大変なことになっていました。なぜなら、こんなにもすばらしい告白をしたペテロでしたが、次の瞬間に取った行動が16:21-23に記されています。「:21 その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。:22 するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」:23 しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」、

やはりペテロはペテロでした。確かに、彼はすばらしい信仰者ではありましたが、彼は教会の土台にはふさわしいとは言えない揺らいでしまうような人物だったのです。ですから、もしこのペテロの上に教会が建っているなら、私たちの土台はすぐにぐらついてしまうようなものです。しかし、教会はペテロではなく「キリストが生ける神の御子である」という告白の上に建っている以上、その土台は決して揺り動かされることはないのです。そして、その土台は昔も今も決して変わるものではないのです。

ということは皆さん、このことを頭に入れた上で言い換えてみると、もし、私たちがこの信仰の告白の上に立っていないなら、イエス・キリストが約束されていた救い主であり神のひとり子であるということを感じていないなら、それは教会ではないということです。私たちは土台を持っていないということです。私たちの周りには教会と名の付く場所や集会はたくさんあります。人数的に見て数多くの人が集まっている大きな教会もあります。皆さん、それらの教会が本当の教会かどうかをどのように判断すればいいか分かりますか？どのようにして判断できるのか？それはその教会の中に聖書が教えているイエス・キリストがいるかどうかを見ればいいのです。もし、そこに聖書の教えている主の姿がないのなら、どれ程その人たちが主を誉め称えていたとしても、どれだけすばらしい伝道の働きや教会のプログラムを持っていたとしても、どれ程多くの人々が集まっていたとしても、その教会は土台のない真の教会ではないということです。

同じことは私たちにも言えます。私たちはこの土台を今日持っているでしょうか？私たちはそもそもイエス・キリストが自分の救い主であること、神であるということを中心から信じて今を生きているでしょうか？自分のすべてをささげて、そして、この方をどんな時も一番にしていきたくいとしてそのような歩みをしているでしょうか？皆さん、もし私たちが口では「私はキリストのことを愛しています」と言ってそのことを否定していなかったとしても、もし、私たちの行動がそれを否定するものであったとするなら、私たちの集まりは教会ではないということです。またもし、私たちがキリストを一番にしてこの方に従っていくことよりも、自分の思いや自分の考え、これまでの伝統などを優先して、キリストとそれらのものを取り替えてしまうのであれば、私たちの集まりは聖書が教えている教会のあるべき姿を反映してはいないということです。私たちの土台はいつもどんな時もキリストに立ったものでなくてはなりません。私たちの歩み、私たちの教会はそのようなものでしょうか？

皆さん、聖書が教えている教会のあるべき姿、それはこのイエス・キリストが生ける神の御子であると告白し、そして、心からこの方に信じ従うその信仰の上に建っているのです。私たちの教会がそこに建っているからこそ揺らぐことがないのです。

2. 教会は揺るがない建設者の所有物である 18b 節

教会のあるべき姿として二つ目に挙げられていることは「教会は揺るがぬ建設者の所有物である」ということです。もう一度18節を見てください。続きにこのように書かれています。「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。」、ここで皆さんに注目してほしい点が二つあります。

1) わたしは教会を建てます : これを言い換えると「教会を建てる建設者は主ご自身である」ということです。最初にも言いましたが、イエスは「教会」ということばを新約聖書の中で初めてここで用いられています。「教会」ということばを耳にすると多くの人は真っ先に十字架の付いている建物であったり、また、礼拝をしている場所を思い浮かべるかもしれません。しかし、ここでイエスが言わんとしている教会はそのようなものではありません。今の私たちが思い描くような、所謂「クリスチャンの教会」というものについてここで触れているのではありません。なぜそのように言えるのか？それはここで教会ということばに対して用いられている「エクレシア」というギリシャ語が建物のことを指しているのではなく、一般的な人々の集まりであったり群衆を表すことばだからです。また、それに加えて「エクレシア」ということばの語源には「呼び出す、召し出す」という意味が含まれています。

つまり、この二つをまとめると「エクレシア」は建物のことを指しているのではなく「召し出された人々の集まり」を指しているということを私たちは見て取ることができるのです。ですから、ここでイエスが言わんとしていたことは「わたしは召し出された人々の集まりを建てます」ということでした。別のことばで置き換えるなら、「主はご自分を神の御子と信じ告白するこの世から救い出された者たちの集まりを建て上げ続ける」とそのように言われたのです。

皆さん、これが主の揺るがぬ建設者としての働き、教会を建て上げる主の救いのみわざでした。私たちがいつも忘れてはいけないこと、それは私たちのうちに主がもし働いてくださらなかつたなら、もし、私たちが主が召してくださっていなければ、私たちはだれ一人として救いを手にすることはできなかつたということです。イエスもこのように言っています。ヨハネ6：44「わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」、生まれながらの人間はみなこの主を自分の救い主として考えることも、神であると受け入れることも望んではいませんでした。罪に汚れていた私たちはどれ程救いがすばらしいものであるということが語られていても、イエス・キリストが私にとって最も必要なものであるということが語られていたとしても、それに耳を傾けようともせず自分勝手に生きていたわけです。罪の中に死んでいた私たちには自分の状況を考えるその考えを変えるためのすべなどあるはずもなく、私たちは生まれながらに主の前に御怒りを積み上げるだけのそのような罪人でした。私たちはいっさいどうすることもできなかつたのです。しかし、そんな希望などいっさいなかつた私たちを主があわれんで、そして、主が働いて私たちに救いへと導いてくださったのです。こうして主が私たちのうちに働いてくださったからこそ、こうして主が私たちに真理を教えてくださいましたからこそ、今私たちは心から「あなたは生ける神の御子キリストです」と告白して主に従っていくことができるのです。私たちが何かをしたからではなく主が働いてくださったのです。

だから、ペテロに対しても主はこのように言われていました。17節「…「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。」と。ペテロに対して「あなたは、生ける神の御子キリストです。」と示したのはペテロが知恵に優れていたからではありません。父なる神がペテロに教えたのです。そして、今の私たちも私たちに知恵があるからではなく神が働いてくださったからこそ、私たちは救いへと入れられたのです。

皆さん、この主は教会の揺るがない建設者であるからこそ、最初から最後まで主がご自分の計画を成し遂げる力のあるお方であるからこそ、教会は建て上げられ続けていくのです。しかし同時に、このようにして救われた私たちはその後何もしないわけではありません。私たちはこの神の協力者として主のために働いて福音をこの地上にあって伝えていくという責任があるのです。パウロもこのように言っています。Iコリント3：6-9「：6 私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。：7 それで、たいせつなのは、植える者でも水を注ぐ者でもありません。成長させてくださる神なのです。：8 植える者と水を注ぐ者は、一つですが、それぞれ自分自身の働きに従って自分自身の報酬を受けるのです。：9 私たちは神の協力者であり、あなたがたは神の畑、神の建物です。」、

私たちには主の協力者として、私たちは主を愛するゆえに主のために働いていくことが求められています。私たちがそのように主のために働いていこうとすれば、もしかすると、私たちの目には失敗にしか思えないようなことに直面したり、どれだけ私たちが主に誠実に仕えようとしていたとしても、私たちの目には何の成果も見られないようなことに直面するかもしれません。私たちが難しさを覚えるのは、私たちがどれ程熱心に福音を伝えてもその実を見ることができないことです。そのようなことが多々あると私の働きは無駄なのではないかと、皆さん、もし私たちがそのように考えることがあったなら、聖書が教えていることは「失望する必要はない」です。なぜなら、それは揺るがぬ建設者である主が昔も今も、そして、この先も変わらずに働いて、ご自身の教会を建て上げ続けられるからです。主がその働きを為し続けられる、主がその働きを成し遂げて行かれると言うのです。

偉大な力であるこの神がご自分のことば通りにみこころを成していかれるのであれば、私たちの責任はこの方に信頼して私たちがたとえ実を見なかったとしても、この主に忠実に歩み続けることです。私たちに今与えられているその責任を感謝して、そして、一つひとつのことを主に喜んでいただきたいという思いを持ってやっていくことが必要になるのです。

2) わたしの教会 : 二つ目のポイントは「わたしの教会」ということばです。これは言い換えれば「教会とはキリストの所有物である」ということです。ある人は教会の所有者は牧師や長老だと考えます。教会のリーダーこそが教会の所有者ではないかと。しかし、聖書が教えていることは、教会のリーダーたちは主ご自身から託された羊を導いて養っているに過ぎないということです。そのことはパウロがエペソの長老たちに向けて、彼らとの別れの際に送ったことばの中にも見ることが出来ます。使徒の働き20：28「あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。」、教会とは「神が愛ゆえに犠牲を払って買い取られたご自身のからだ」だということです。そして、キリストによって召し出された人はみなキリストの所有物だということです。

それなら、私たちが気を付けるべきこと、真剣に考えなければいけないことは、私たちが他の兄弟姉妹にどのように向き合いどのように扱っているかということです。もし、ある人が「私は心から神を愛しています。でも、教会の人は私と合わないから苦手です。」とそのように言うなら、それは大きな問題です。神を愛して神に愛されている神の家族を憎むということ、冷たく扱うなどということは決してあってはならないのです。実際の私たちの歩みはどのようなものでしょうか？私たちは主が愛してくださっているように互いに愛し合い、主が赦してくださったように互いに赦し合い、主が人々に仕えられたように互いに仕え合うような者でしょうか？それとも、自分の価値観や考えとは違うから気に食わないという理由で主の所有物である兄弟姉妹をないがしろに扱っていないでしょうか？

私たちは主に対して振舞うのと同じように人々に対して振舞っているのでしょうか？私たちが今兄弟姉妹に対してしているのと同じことを主に対してできるのでしょうか？もし、そこに大きなギャップがあるなら、私たちが考えなければいけないことは「私は本当にキリストを愛しているのか？」ということです。キリストが愛している教会を私たちも愛するのです。

聖書の教える教会のあるべき姿、それは教会の建設者であり所有者であるキリストに信頼して、主に召し出された者として互いの間でみことばを実践していくことです。

3. 教会は揺るがない約束に守られている 18c 節

18 節の最後にこのように書かれています。「ハデスの門もそれには打ち勝てません。」、ここにある「ハデスの門」は何を指しているのか？このことについても様々な考え方があります。(参照箇所: ヨブ 38 : 17、詩篇 9 : 13)。ある人たちはこれは教会に対するサタンの攻撃ではないかと考えます。また、ある人たちは「ハデス」ということばが死んだ人たちが行く場所を意味していると言い、また、「門」がかつて村の長老や支配者が集まって裁判をする権威のある場所として考えられていたことから、どんな権威や権力、たとえサタンであっても死の持つ力でさえも教会を打ち負かすことはできないと考えました。恐らく、後者の考えがここでは適していると思われませんが、いずれにせよ、イエスがここで言わんとしていたことは明白です。

それは、どれだけサタンが働き死の力がその働きを妨げようとしても、それらが教会を打ち負かすことは決してないということです。教会の働き、教会を建て上げることは主が為される以上、それは必ず成し遂げられるのです。また、死に勝利された生ける神の御子、その方を信じる者たちも同じように、死に対して勝利することができるのです。主を信じて生きている者、生ける神に信頼を置いて信仰をもって生きている者は、これまでのようにもう死を恐れる必要はない、永遠のいのちが与えられていると、そのような約束によって教会は守られているのです。

このことに関してジョン・カルヴァンはこのように言っています。「サタンのどんな力に対しても教会の堅固さは揺らぐことがないと証明される。なぜなら、教会が信頼を置く神の真理が決して揺り動かされることがないからだ。」と。教会の立つ神の真理が決して揺り動かされないものである以上、私たちの教会もどんなことがあったとしても揺り動かされることはないのです。約束の救い主としてこの地上に主が来られ、罪のために十字架に架かって三日目にその死に勝利されてよみがえられたからこそ、私たちはこの方によって永遠のいのちが与えられているのです。今、私たちはもう心配して恐れを抱く必要はないのです。私たちはかつて死んだ後どこへ行くのか？地獄に行くという恐れしかなかった者ですが、今は主にお会いするその日を楽しみにしながら生きていくことができる、そのような者に変えられたのです。

ですから、パウロもこのように言っています。I コリント 15 : 54-57 「:54 しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのまれた」としるされている、みことばが実現します。:55 「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」:56 死のとげは罪であり、罪の力は律法です。:57 しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。」と。かつて罪と罪過の中に死んでいた私たち、主の燃える御怒りにしか値しなかった私たちが、キリストのあわれみによって永遠のいのちが与えられ、新しくされた者として生きていくことができる、希望に溢れた勝利者として今を歩んでいくことができる、そんなことが可能になったのです。この約束を私たちは今持って生きていくことができるのです。

そうであるなら、主を愛する者たちの応答はこの主に対して忠実に仕えていくことです。私たちはこのようなすばらしい約束を知っていますが、それは私たちだけのものではありません。すばらしい主の十字架のわざを福音のすばらしさを他の人にも伝えていきたい、そのことを大胆に証していきたいとして私たちは生きていくのです。もちろん、それには難しさも伴います。私たちが忠実に生きようとすればするほど、迫害を受けて傷つくことがあるのです。家族の中で？職場かもしれない。信仰のゆえに戦いを経験することがあるでしょう。親しくしていた友人が離れて行くことがあるかもしれません。みことばに忠実であろうとすればするほど、周りの人たちはおかしな目で私たちのことを見るかもしれません。思い返して見れば、まさに、それこそがイエスが歩まれた人生でした。

テキストを見てください。「ハデスの門もそれには打ち勝てません。」と述べた後に、21節からご自身のことについてこう言われました。「その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。」、イエスはご自身が多くの苦しみを受け最後には何の罪も犯していないにも関わらず、十字架に架かって死ぬということを知っておられたのです。苦しみが目の前にあることがイエスは分かっていたのです。彼がしたことは逃げ出したことでしょうか？そうではなく、分かっているにもかかわらず最後まで父なる神のみこころに従い通されたのです。

私たちがこの模範に倣っていくのであれば、私たちがキリストの模範に則って生きていこうとするのであれば、確かに言えることは、そこには必ず迫害があるということです。パウロもテモテに対してこのように言っています。Ⅱテモテ3：12「確かに、キリスト・イエスにあつて敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」と。それでいてパウロはテモテに対してこのようなアドバイスを送っています。4：2にこのように書かれています。「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。」、どんなときであつてもしっかりみことばを伝えていきなさい、どんなときも主のみことばに立ちなさいと教えたのです。

皆さん、迫害を受けないために私たちができる最も簡単なことは何か分かりますか？それは私たちがこの世と同じようになることです。私たちが人々の前で光を照らすことを止めればいいのです。人が聞きたいことだけを話して、厳しいメッセージを除いて受け入れてもらえることだけを話せばいいのです。そうすれば迫害を避けることができます。たとえ、聖書が聖く正しい神について教えていても、聖書が私たちは神に逆らって生きるゆえに生まれながらに神の御怒りを受けるべき愚かで罪深い者であると教えていても、それを無視して神の愛だけを語っていればいいのです。迫害を避ける方法、それは妥協することです。妥協してしまえば迫害を避けることが出来るのです。

でも、もし、私たちがそのようにして聖書が教えている真理を忠実に語り続けていくことよりも、自分たちの思いを優先してしまうなら、神よりも人を恐れる者として生きていくなら、その教会は教会ではなくなってしまいます。私たちがみことばの教えから外れて妥協してしまうなら、それはもう主が教えている教会の姿ではなくなってしまいます。皆さんも感じておられると思いますが、世の中はどんどん悪くなっています。神の真理を捻じ曲げてみことばが教えていることと正反対のことを押し進めようとしているのです。私たちが聖書から語り続けていくなら、恐らく、そこには人々の反感を買うことが起こるでしょう。でも、そうであつたとしても、私たちはみことばに立ち続けることが大切になります。

私たちがもしこのことに妥協してしまうなら、私たちの教会は根底から崩れ去ってしまいます。キリストにあつて永遠のいのちが与えられて、そんなすばらしい救いが与えられた私たち、キリストにあつて罪や死の力に対して必ず勝利できるという約束が与えられている私たちの責任は、この地上にあつて最後の最後まで主を宣べ伝え続けることです。みことばの権威に立ち続けること、それが私たちに求められている教会のあるべき姿です。揺るがない約束を信じて、たとえ、どんな迫害が待っていてもみことばに立って人々に福音を伝えていく、それが聖書が教えている教会のあるべき姿です。

4. 教会は揺るがない権威をもっている 19節

19節「わたしは、あなたに天の御国のかぎを上げます。何でもあなたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたが地上で解くなら、それは天においても解かれています。」、この箇所についても解釈するのが難しくいろいろな考えがあります。しかし、この箇所が言わんとしていることをまとめるなら次のように言えると思います。大切なポイントが二つあります。

1) **天の御国のかぎ** : あなたには「天の御国のかぎが与えられている」ということです。「かぎ」は比喩的な表現で私たちが普段かぎを使って扉を開け閉めすることができるように、天の御国を開け閉めすることができる権威が与えられているという、教会はそんな権威をもっているということです。

2) つなぐ、解く : また、ここで「つなぐ」「解く」ということばが繰り返されていますが、これは当時のユダヤ人指導者にとって親しみのある表現の一つで、彼らには律法に基づいて、相手に何かを禁じること、つなぐこと、また、逆に許可を与えること、解くこと、そのような権限が与えられていたのです。このことに関してヨハネ20:23ではこのように教えています。「あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦され、あなたがたがだれかの罪をそのまま残すなら、それはそのまま残ります。」、ここで皆さんに注意してほしいことは、これは私たちが自分たちの価値観や考えに基づいて人の良し悪しを判断するということを教えているのではないということです。私たちは自分勝手に人をさばくものではありません。私たちの基準はいつも聖書です。だから、聖書に基づいて物事を判断するとき、神の定めた基準に照らし合わせて物事を判断するとき、それに反しているなら「NO」と言い、それにふさわしいなら「良し」とその人に伝えることが出来るのです。

ですから、たとえば、罪を悔い改めない人に対して私たちは福音を伝えますが、悔い改めない人には私たちは聖書の権威に基づいて「あなたが悔い改めないのなら天に行くことができません。あなたには永遠のさばきが待っています。」とはっきり伝えることができるのです。また、逆に、主を自分の主と信じて従おうとしている人には、同じように聖書の権威に基づいて「あなたには罪の赦しが、永遠のいのちが与えられています」という確信を与えることができるのです。

なぜ、私たちはそのようなことができるのか？それはみことばという権威に教会が立っているからです。神の権威に則っているからこそ、私たちはそのように言うことができるのです。神が定めている基準、聖書の権威にすべてをゆだねて生きていくこと、これこそが教会のあるべき姿だということです。決してそこを揺るがせてはいけません。

まとめ

さて、今朝私たちは教会のあるべき姿として、その土台となる部分を見て来ました。皆さん、どうですか？私たちの歩み、私たちの考えていた教会は聖書が教えている姿と合ったものですか？聖書が教える教会のあるべき姿、それはイエス・キリストが生ける神の御子であることを告白して、その主を心から信じて従うその信仰の上に立っているものでした。私たちの土台はそこにあったのです。

また、教会の建設者であり所有者であるキリストに信頼して、主に召し出された者としてお互いの中でみことばを実践していくということ、そのことも私たちにとって大切なことです。主にある揺るがない約束を信じて、たとえ、どんな迫害、苦しみが私たちを待っていたとしても、決して揺るがされることなく権威あるみことばに立ち続けて、人々に福音を伝えていくということも教会の土台として大切なものです。皆さん、私たちはこの土台の上に立っているのです。もし、私たちがその土台から何かを引き抜いてしまったり、その土台を別のものに置き換えてしまうなら、私たちの教会は揺らいでしまい、もう教会ではなくなってしまいます。

私たちに与えられている責任はこの土台の上に立ち続けることです。ですから、主を益々愛して、この主を誉め称える神の群れとしてともに成長していきましょう。